

『歸眞總義』 — 中央アジアにおけるその源流

濱田正美

(神戸大學)

明末崇禎年間に、アーシク‘Āshiq と名乗るひとりのインド人が南京に姿を現した。若干の中國人ムスリムが彼に師事したが、そのうちのひとり蘇州出身の張中なる人物は、師の講義を筆録し、鼎革の後になってこれを公刊した。これが『歸眞總義』と略稱される書物であり、明末から清代にかけて出現した数多くの漢文で著されたイスラーム文献のうち、最初期に属するもののひとつである。書名に採られている「歸眞總義」とは、アラビア語のイーマーン・ムジュマル *īmān mujmal* の漢譯に他ならない。イーマーン・ムジュマルはイーマーン・ムファッサル *īmān mufaṣṣal* と對になるイスラームの信條であって、一般にはシャハーダそのものを指すとされているが、この書物に見えるそれはシャハーダとは異なり、「私はその名と屬性によって（示されている）通りに神を信じる。そして私はその命令の全てを受け入れる」というものである。本書は漢字轉寫によるアラビア語本文、その漢譯、アーシクによる注、張中の疏から構成され、注と疏においては、イブン・アラビー流のいわゆる存在一性論が、ペルシア語文献からの引用を交えて解説されているが、禪佛教や新儒學から借用された用語が散見する。現在の中國イスラーム教の用語では、イーマーン・ムジュマルを「總信」、イーマーン・ムファッサルを「分信」と譯し、後者はいわゆる「六信」と同義とするが、奇妙なことに張中自身や康熙時代の劉智はこれを「七信」と數え、現在も一部ではこの數え方が踏襲されている。シャハーダとは異なる信條をイーマーン・ムジュマルと稱し、「六信」に代えて「七信」を數えることは、中國のイスラーム教特有の現象ではなく、その源流は 14 世紀以降の中央アジアで編纂され、現在も廣く流布している教理解説書『チャハール・キターブ *Chahār Kitāb*』に求めることができる。

濱田正美 HAMADA Masami

1946 年生

神戸大學大学院文學研究科教授

主要著作 「歸眞總義初探」 “L’inscription de Xiata (Shata)” “Jihād, hijra et «devoir du sel» dans l’histoire du Turkestan oriental” “Introduction (au numéro spécial : Saints et héros sur la Route de la Soie)” “Le mausolée et le culte de Satuq Boghrā Khān à Artush” ほかも多数